

対称詞の諸相

—TVドラマ『ビューティフルライフ』に見る—

小林美恵子

1. はじめに

小論では遠藤(2000)によっても論及されているTVドラマ『ビューティフルライフ』の主人公松二と杏子の用いる対称詞について検討する。ドラマの梗概、内容や談話等に関する評価については、遠藤(2000)を参照されたい。

実は、最終回にいたって、初めてこのドラマを見る機会を得たが、主人公の青年が恋人を「おまえ」と繰り返し呼ぶのが耳についた。障害のある恋人と同じ目線で自然にものを見る主人公の描かれ方が好評であるとは聞いていたが、そういう青年であっても恋人を上から見下すかのような「おまえ」を使うのかと驚いたのである。ところが、その後、最初の回から通して見てみると、彼の恋人に対する呼称は「おまえ」だけではなく「あなた」「あんた」「杏子」「姉ちゃん」(独白ナレーション部分には「君」が使われている)などと多様なことがわかった。それだけでなく、この青年は、同僚で以前恋人だった女性には「おまえ」、予備校時代に好きだった女性には再会しても自分からは呼びかけないなどと、相手によるきめ細かな呼称の使い分けをしている。また、杏子の兄正夫が恋人のサチ(杏子の友人)を「おまえ」と呼んだとき、サチが「男尊女卑だ」と抗議するなど、登場人物の対称詞に反映している作者の眼には興味深い点が多い。

現実の自然談話では、対称代名詞が使われる頻度はきわめて低い。小林(1997)によれば、職場資料の発話総数10863に対して「あなた」「あんた」「おまえ」などの出現数は呼びかけと言及用法の両方合わせても26例しかない。「名字・名前(さん・ちゃん)」「先生」「課長」などの役職名による対称詞を合わせても131例(発話総数の1.20%)にすぎない。

日本語における対称詞は周知のとおり、文法的に不可欠な要素として人称

を表すために使われるというより、待遇表現の一種として、話者がその文にこめた意図や相手に対する意識を反映し、使用・不使用の決定や用いる語の選択が行われる。「あなた」が標準的な対称代名詞であると言われ、「あなた」「おまえ」「君」などと比べて待遇価値も高い丁寧な言い方とされるが、この語にしても下位者から上位者（いわゆる目上）に向かって用いることはできない。上位者に対しては「名字＋さん」なども使いにくく、役職や「奥さん」「お客さん」などという立場を示す呼称が用いられることが多いが、これらも場合や相手によっては使いにくい。そのような制約のもとでは使わずに済ませようという切り抜け（negotiation）が行われることも多いだろう。その結果、自然談話における対称詞は少なくなるのだと考えられる。

筆者の興味の一つは、対称詞が待遇上の制約以外に、どのような表現上の意図によって選択され、また不使用の選択が行われるかということである。このようなことを調べるのに、対称代名詞自体がきわめて少ない自然談話ではむしろ限界がある。作られたものであるにしろ、自然であると評価され、ある程度の量の用例を持つドラマを資料として、ここに現れる対称詞を分析することによって見えてくるものもあるかと考えた。これらの対称詞は作者や演出家、また俳優によって作られたものであるが、同時にある設定の下で自然なものとして選ばれ、視聴者にも受け入れられたものとして、現実と見立てることが可能であると考えたのである。

分析の資料としては放映後に発売された『ビューティフルライフ』のビデオテープ全11回分の台詞を文字化したものを用いた。ドラマのシナリオ（北川2000）が放映後に角川書店より出版刊行されているが、実際の放映版とは、内容は一致しているものの台詞自体や場面転換などについてかなり異なる。それゆえ、シナリオを資料として用いることはしなかった。ただし、後掲の用例の場面番号については、便宜上シナリオの場面にしたがって付けた。1回のドラマはおよそ30～50程度の場面から成っており、この場面にそれぞれの回の冒頭から振っていった番号である。

なお遠藤（2000）によって、筆者の検討とほぼ同時期に文字化資料のデータベースが作られたが、小論ではこれを利用していない。

2. 待遇的価値による対称詞の使い分け

図1・2は終二と杏子が会ってから最終回まで、二人がお互いにどのような対称詞で呼び合っているかをドラマの回ごとに整理したものである。

終二から杏子への対称詞の使用

(図1)

回	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
あなた	⑩⑩				④	④④			⑤		
あんた	③③*	**	*****	****	*	*	*	⑫⑫***⑫		*	
杏子					*	**	⑫⑫***⑫		** **	*	** *
おまえ							⑨		⑩	⑩⑩*⑩****⑩	* ***** ⑩⑩⑩
そっち					*						
ネちゃん						*					*

杏子から終二への対称詞の使用

(図2)

回	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
あなた	②②②③③③	*	⑤**					⑦⑦			
あんた	③			③						⑧	
終二					**	*	**	***** *	***** **	*****	*****

(図について)

各対称詞について*または○番号1つがその語の1回の使用を表す。ただし同一語形の単純な繰り返し(「おまえ、おまえ」など)は1回の使用と数えた。なお①～⑫は3.1以降に引用する用例に付した番号である。

終二は初対面の「あなた」からすぐに「あんた」と杏子を呼ぶようになり、5回目で「杏子」、6回目の最後には「おまえ」を使い、以後杏子の死までこの2つ呼称をおもに使っているが、最後に近づくにつれ「おまえ」中心になっていく。杏子のほうは3回目まではほとんど「あなた」、5回目以後「終二」と呼ぶようになると最後までほぼその呼び方のみを貫く。それぞれの対称詞の変化は、一応疎から親へと待遇意識が変化することに対応してい

るといってよいだろう。ただ、終二が「あなた」からただちに「あんた」へと呼びかけを変えるのに対し、杏子はかなり後まで「あなた」を用いること、終二が多用する「あんた」を杏子は例外的にしか用いず、「おまえ」は全く用いないなど、待遇意識に対応する語形には男女間で差があることが見える。

第7回で、恋愛関係にある正夫（杏子の兄）とサチ（杏子の友人）が口論し、正夫が「おまえに何がわかる」と決めつける。するとサチはその会話の内容よりは「おまえ」と呼ばれたことに「男尊女卑」だとして反発し、「わたしだって『あんた』と呼ぶよ」と言う。

正夫「いいじゃねえか。呼べよ。『あんた』と『おまえ』」

サチ「それじゃ演歌じゃん。がっかりい！」

というのが、続く2人の会話である。ここでは、男性の「おまえ」に対する女性の対称詞が「おまえ」ではなく、丁寧度からいえば一段高いと思われる「あんた」と意識されていること、「おまえ」と呼ばれて「あんた」と答えるような対称詞使用を若い女性は好ましく思っていないことがわかる。「あんた」の使用がきわめて少なく、「おまえ」は用いない杏子の対称詞使用も、同年代・同性の親しい友人どうしであることから、サチと同様の意識によって行われていると推測できる。

なお、正夫とサチは、普段は「正夫さん」「サッチャン」と呼び合い、終二と杏子のように名前を呼び捨てにすることはなく、他の対称詞も用いない。これは2人の年齢が離れている（正夫33歳、サチ26歳。なお終二と杏子はともに27歳と設定されている）ことや、恋人である以前に「友人の兄」「妹の友人」という立場が意識されていることによるのだろう。

3. 「排他的指示」と「踏み込み」

特定の関係において親疎の変化によって使用される対称詞が変わるにしても、その転換時の発話には、文型や発話意図において、それまでとは違うなんらかのきっかけがあるはずである。また、おもな対称詞が変化したあと、以前に用いられた対称詞や通常は用いられない呼びかけなど（終二の「そっち」「ネエちゃん」や杏子の「あんた」などがこれに当たる）が使われる場

合にもそれなりの理由があると考えられる。これらの変化は、語の内在的意味（対者を指し示す）や親疎・上下に基づく待遇的な意味では説明できない談話的な意味を持つと考えられる。小論では、「あなた」「あんた」「おまえ」を中心とする対称詞の持つ「排他的指示」「踏み込み」とそれを補償するはたらきに注目して、これらの対称詞の持つ談話的意味や機能について考える。

小林(1997・1999)において、いわゆる対称代名詞の呼びかけ用法には、

- ・誤解なのよ、あなた、お弁当買ってくることぐらい、誰でも大したことないじゃん、ぜんぜん。(小林1997 女性20代→女性20代)
- ・はっきりいいな、あんた、はっきり。(小林1997 女性30代→男性10代)
- ・おまえ、この短い魚はなんだ？(小林1999夫→妻)

のように、相手を否定したり、命令したり、問いただす文脈で、相手の注意を喚起し、念を押すために用いられる傾向が強いことを指摘した。この場合の対称詞は文意としては省略も可能で、ただ、相手を話者でも第三者でもない対者として、強く指示する働きのみを持つ。この働きを小論では「排他的指示」とする。

この働きは呼びかけ用法だけでなく、言及用法にもあると言える。

「あなた、誤解(してる)よ。／あなたは誤解してるよ。／あなたの誤解よ。」

のような例において、後2例は最初の呼びかけ用法よりもさらに強く相手を指示し、語調を強めているといえよう。この場合「さらに強く」指示するのは後続の助詞の「取り立て」によるのだが、「あなた」自体にも相手を話題に関わりのあるものとして指示する機能が含まれる。

さて、そのように排他的に指示されることによって、対者は話者の領域に任意に位置づけられ、自己の領域を侵されることになる。小論ではこれを話者の側から見て「踏み込み」と名付ける。Brown and Levinson(1987)のポライトネス理論におけるFTA(Face Threatening Act)の1つとされたものに当たると考えられるが、ポライトネス理論については十分に検討していないので、ここでは一応それとは分けて考えておく。

対称詞は「踏み込み」の働きを持つと同時に、それ自体に含まれる待遇的

価値により、この踏み込みを緩和し補償する働きもあわせ持ちうる。それぞれの働きの度合いや性質は対称詞それぞれによって違うのではないかと考える。高橋（1999）では「先生」という呼びかけをポライトネス理論によって検討し、NPS(Negative Politeness Strategy 敬称としてFTAの補償をする)とPPS(Positive Politeness Strategy 恩顧を得るために距離の短縮をはかる)の両方の機能を持つとした。「あなた」「あんた」「おまえ」や、名前による呼びかけも、それぞれに度合いや性質の異なる指示・踏み込み機能や、それを補償する機能を持つと考えられる。用例により確認していく。

3.1 〈「あなた」〉

終二と杏子のお会いはおだやかなものではなく、互いに相手を批判しあうことから始まる。車を運転しながら手を出した杏子に、バイクで横を走っていた終二が脅かされて、非難を浴びせる。続いて杏子の勤務先の図書館で、杏子の憎まれ口には終二が応酬する。()内はいずれも回と場面番号である。

- ①-1 だからあなたがこうやって手を出したおかげでね、あやうくおれはここで、こう・・・おい！ (1-3)
- ①-2 杏子「とても本読むタイプには見えないけどね」
終二「あなたもね」(1-6)

この段階での終二に対する杏子の対称詞使用は次のようなものである。

- ②-1 とにかくあなたも並んで、(1-7)
- ②-2 何よ、あなた、お説教？(1-12)
- ②-3 ねえ、あなたさ、この間も変な時間に来てたけど、何やってる人なわけ？ (1-12)

①②に共通するのは相手への批判的態度である。批判は一般的に相手のフェイスを脅かす踏み込み行為といってよい。ただし、この場面の2人はまだ批判的関係以外を持たない未知の人間どうしだから踏み込みを緩和するような補償を必要としないのだろう。むしろ、必要なのは相手との距離を保った

上で、確実に踏み込み、批判するという方策である。①-1で終二が「おまえ」や「あんた」を用いたとすれば、その語の持つなれなれしさによって、杏子に警戒心を起こさせ批判は効をなさない。相手を自分とは切り離れたところで独立して扱い（これが「排他的指示」である）、かつ、相手のフェイスを侵す機能を「あなた」は持っている。特に②においては、すべての「あなた」はなくても文意は通じる。しかし「あなた」と指示することにより、批判は緩和されるのでなくより強烈になる。

終二は「あなた」での2回の呼びかけの後、(1-12)では、③-1のように、すでに「あんた」と呼びかけている。③の2例も相手への問いかけや、申し出であり、踏み込みがあることには変わりはないのだが、①②のような批判的態度ではない。むしろ、問いや誘いに答えを求めるための距離短縮ストラテジー（PPS）として「あんた」は用いられている。この後、終二は杏子を「あんた」と呼び続けるが、例外的に「あなた」を用いるのが④⑤の各例である。

③-1 (ボランティアの美山は) あんたのこと好きなんじゃないの？だからデートに誘ってる。(1-12)

③-2 ああ、だったらおれがあんたのバリアフリーになってやるよ。
(1-20)

④-1 図書館司書ってさ案外むずかしいんでしょ。おれ、あなたとつきあいだしてから聞いたんだけどさ、周りのやつに。(5-22)

④-2 ね、おれがこの店見つけるのにどれだけ苦労したか知ってるの？今あなたが行ってらっしゃった車椅子用トイレがあって、段差なくて、ファミレスじゃなくて、しかもださくないとこ。(6-17)

④-3 ん、なんか言いたいけど、あなたじゃないから出てこない。(6-17)

⑤ この本を並べるのはあなたの仕事だから、全部ぐわーっと並べるから、よろしくね。(9-25)

④-1は、終二が有名美容師であることに、自分とは住む世界が違うと拒否的な態度を示す杏子に苛立つ、④-2. 3は自分が見つけた喫茶店に他の男

友達という杏子に会って怒る、いずれも終二の発話である。「あなた」は終二が杏子に怒りを示す場面に現れており、強い怒りが「あなた」という排他的な指示によって示されている。ただ、④-2は、若い女性のトイレ使用について言及するという踏み込みを、「あなた」や「いらっしゃる」という他の場面では見られない敬語の使用によって、距離をとることにより補償しているとも考えられる。⑤は終二の「あなた」の中で唯一、相手への否定的意図のないものである。終二が杏子と将来をともに暮らす決意を固め、自分の夢である美容院のレイアウトを杏子に語る。ブックコーナーを設け、その管理は司書である杏子に任せるという文脈である。「あなたの仕事だ」という判断は、相手を指示して決めつける踏み込みであり、「おまえ」を用いたならば、上位者から下位者への命令の様相を帯びる。待遇的にはあらたまった「あなた」で指示することにより、相手の仕事や位置を相手自身のものとして明確にしている。難病のため、終二の将来の伴侶としての自分に自信を持っていない杏子に、自分の一部としてでなく、独立した人格として傍にいて望むという終二の意図が、あえて相手との距離をとる、この「あなた」によって、より明確に伝わることになる。

杏子の場合は3回目までは、②のような否定的内容の他に、次の⑥のようなものを含め、終二に対しては基本的に「あなた」を用いている。⑥-1.2.3のような心情の表出は終二ならば「あんた」で行われているはずである。また⑥-4は実際に終二の「あんた」の呼びかけに呼応しているし、第三者が相手を愛しているのではないかという言及は③-1の終二の発話内容とも一致している。杏子が「あんた」を使わないのは、一つには距離の維持、もう一つは女性が使う「あんた」の丁寧度が男性に比して低いことによると考えられる。丁寧度が低いということは、PPSとして相手との距離感を縮めることによって、踏み込みによる侵犯を補償することになり、距離の維持ができなくなるということにもなる。

⑥-1 あなた、信じてまかせろ。(1-24)

⑥-2 あなたにおんぶしてもらおうのがいやだったんじゃないの。(1-28)

⑥-3 それ、あなたにわかっちゃうのが、恥ずかしかったんだ。(1-28)

⑥-4 柗二「じゃ、あんた傷つかないの？」

杏子「(柗二の同僚真弓は) あなたのこと好きなんでしょ？」

(3-20)

なお、この後杏子は「柗二」と、相手を名前で呼ぶことになるが、後半で次の⑦のように「あなた」を用いる。これは、自身の障害を思っ、て、彼女が柗二と別れる決意をする場面である。ここでも、⑥と同様の距離の維持が図られている。

⑦-1 わたし、いろいろ考えたんだ、あなたのこと (8-40)

⑦-2 そいで、やっぱりあなたは普通の人とつきあったほうがいいと思う。(8-40)

3.2 〈「あんた」と「おまえ」〉

柗二には多用され、比較的ニュートラルな対称詞として用いられている「あんた」は杏子には次の3例しか使用されていない。

⑧-1 (かわいくないと言われ) これはさ、生まれつき。ちょっと、あんたさっきからなにやってんのよ。(1-12)

⑧-2 あんたんちに行ったのは成り行きだし、何があったわけでもないし。(4-29)

⑧-3 あんたになんかあわなきゃよかった。(10-27)

⑧-1 は二人が出会ったばかりで、杏子は柗二に対し、どちらかというともまだ敵対的な感情を持っている時点で、彼女の膝に借りもしない本を積み上げて去る柗二を咎めているのだが、思いがけない相手の行動に度を失っていることばである。⑧-2 は成り行きで柗二の家に泊まってしまい、翌朝あわてることば、⑧-3 は病で死の宣告を受けた後、柗二にそのつらさ、悲しみを訴えることばで、いずれも我を忘れ、激しい自己表出をする発話である。文脈的にはいずれも相手を批判したり、拒否したりという内容ではあるが、

対称詞によって相手を指示し踏み込んだり、逆にその補償をさせるという意識は希薄である。ただ、この場合、相手との距離は、自分の一部と言ってもよい短さで、機能としては踏み込みとその補償を同時に行っていると言えよう。指示の度合いは「あなた」よりは弱い。

終二の発話において、このような役割を果たしているのは「おまえ」である。この語が最初に現れるのは、遊園地で自ら主張してアトラクションに乗った杏子が恐怖感で貧血を起こした後のことばとしてである。杏子の様子に自分も度を失ったという心情の表出である。

- ⑨ いや、さっきさ、おまえがあれに乗るとか言い出してさ、そいでやめてって叫んだときさ、顔色真っ青だしさ、このまま、こいつどうかなっちゃうんじゃないかって・・・びびった。(6-33)

この後「おまえ」が現れるのは、終二が杏子とともに生きていく決意をし、杏子も受け入れて、しばらく平穏なときが過ぎるところで、⑩の各例のように、相手への否定的言辞でフェイスを侵すが、同時にその補償として親称としての「おまえ」が用いられているようだ。終二からいえば、強い親しみの表出ということになる。ただし、⑨や後出の⑪の各例も含め、「おまえ」に対してはサチのような抗議もあり、呼ばれる女性が必ず親しみととるかどうかは別問題である。

- ⑩-1 おまえ自分で 言ってるんじゃないのか。(8-40)

- ⑩-2 さぶさぶ、さむいよ、それ、おまえね、そういうのってしゃべるのに自信のない、イケねえやつがやることなの。(9-1)

- ⑩-3 煮てくうぞ、おまえ、開けとけよ。おれだろ。(9-1)

⑪-1.2例は間近な死を宣告され、失踪する杏子を探し出したときの、⑪-3.4は死んでしまった杏子に向かって呼びかけている終二のことばである。いずれも相手に対する批判や要求を示し強い働きかけの意味を含む。この場合「おまえ」はそのFTAを補償するというよりは、働きかけの一部として、相手に踏み込んでいく役を果たしているように思われる。特に死者に対する

呼びかけは、相手を慮る必要はなく、強く指示し、踏み込んでいる。そこには⑨や杏子の⑧「あんた」と共通する激しい自己表出が見られる。

- ⑩-1 おまえこんなとこで何やってんだよ。(9-56)
- ⑩-2 おまえ、ひとりで死のうなんてするなよ。(9-56)
- ⑩-3 おまえしかとすんなよ、おまえ。おい！(11-51)
- ⑩-4 きれいにしてやってんだろ、笑えよ、おまえ、杏子！(11-51)

3.3 〈「あんた」と「名前」〉

最後に柗二によって最も普通に使われる「あんた」と「名前」の差異について見ておく。

- ⑫-1 でも、おれ、あんたがいなくなると思ったらさ、杏子がいなくなると思ったら胸わしづかみにされたみたいに痛くなってさ(8-32)
- ⑫-2 ごめん、おれ、あんたが好きだわ。(8-32)
- ⑫-2' どういうふうに言われても杏子じゃないとだめだわ。(8-32)
- ⑫-3 おれ、あんたのことあきらめないから。(8-40)
- ⑫-3' 杏子のことあきらめらんない。(8-40)

第8回で、柗二が杏子にはっきりした愛情の意思表示をする場面で⑫のように3回の「あんた」「杏子」の繰り返しが見れる。これらの言い換えでは、最初に直接的に相手に心情を表白して働きかけ、次にやや客観的に自己を観照して言い直すという形が取られている。⑫-2の「ごめん」とか、⑫-3「～から」などがそのことを示しているが、「あんた」や「杏子」もそれぞれの意図に寄与しているはずである。「杏子」とか「杏子ちゃん」のような愛称、親称による呼びかけは、ポライトネス理論ではPPSとされるが、この場合の「あんた」は名前よりもさらにその働きは強いことになる。

実際には柗二が「あんた」を使うのは「杏子」を使うのよりずっと早い時期で、いわばより疎の関係で、すでに用いられている。ただし「あんた」はNPSとしての機能はもたないから、初期の「あんた」は、「あなた」に比し

て取り立てが弱く、相手への踏み込みが弱いゆえに使用されたと見るべきか。また杏子の用いる「あんた」は「あなた」や「柗二」と比肩しない特殊例と見られることから、この「あんた」という対称詞はきわめて多様な相を持ち、それゆえ、かなり自在な使われ方をしていることが察せられる。柗二という人物にこの語を多用させることにより、人間関係に柔軟で、バリアフリーな発想をする青年という造形をした作者の意図を見ることができよう。

4. まとめ

このテキストに見られる、男女、同年齢、対等な関係での対称詞については次のような特徴が認められた。

「あなた」は強い排他的指示の機能を持ち、相手との距離を維持したまま相手の領域に踏み込む。踏み込みを補償し距離短縮をはかるポライトネス・ストラテジーの機能は認められない。日本語の対称代名詞の代表的なものでありながら使用に制約が多いのはこのゆえと考えられる。

「おまえ」はきわめて強い心象表白とともに用いられる。この場合も排他的指示機能が強く、自己中心的な用法といえる。女性によって用いられる「あんた」についても同様である。一方で「おまえ」は特に形の上での強い命令や批判が、遠慮のない関係で気軽な冗談としてなされるときに、踏み込みを緩和する意図によって用いられる場合もある。待遇表現形式としては上位者から下位者にしか使えない語形であることとあわせ、この語が親しみを表すと同時に呼ばれる相手によっては忌避される原因がここにあると見る。

「あんた」はこのテキストの男性においては、比較的ニュートラルに用いられている。「あなた」ほどには指示が強くなく、相手に踏み込まない。同時に「おまえ」ほどに自己中心的でもない。場合によっては踏み込みを緩和するポライトネス機能を「名前」の呼びかけよりも強く発揮する。それゆえ比較的早い時期、相手との関係がまだ疎である段階から使用されている。ただし、女性によって使われる場合は前述のとおりまったく違った様相を示し、その結果待遇的な価値も男性の「おまえ」と同じく「名前」よりも下位に位置づけられるべきかと考えられる。

以上のとおり対称詞には単なる待遇的価値にとどまらない諸相があり、これが待遇価値の決定にも影響を及ぼしていること、また使用上の選択の基準ともなっていることがわかる。小論では、紙数の制約もあり、主人公の男女それぞれの「名前」による呼びかけや言及、終二の他の女性への対称詞（特に「おまえ」）、他の男女登場人物の用いる対称詞などには触れる余裕がなかったが、ここにも更なる選択や使用・不使用の基準の存在が予測される。

参考資料・引用文献

遠藤 織枝2000「人気ドラマの話しことばにみる性差—TVドラマ「ビューティフルライフ」の文字化資料から—」（『ことば』21号）

北川悦吏子2000『ビューティフルライフ』シナリオ 角川書店

小林美恵子1997「自称・対称詞は中性化するか？」（『女性のことば・職場編』現代日本語研究会・ひつじ書房）

1999「自称・対称とその省略—映画『女人四十』に見る」（『ことば』20号）

高橋 圭子1999「日本語会話における対称詞—ポライトネス理論からの検討」（『ことば』20号）

Broun,P and Levinson, S. 1987 Politeness: Some universals in language usage. Cambridge University Press.

（こばやし みえこ）